編集後記 I

上岡一嘉先生は誰よりも本学を愛し学生を愛しておられた。この追悼号の編集後記の場をお借りして上岡先生の考えておられた本学の「建学の精神」,「University Identity」を確認しておくことは意義深いことと思われる。

まず本学の母体である白鷗女子短期大学の建学の精神について述べることとする。白鷗短大の College Identity は,「自立できる技能を身に付けた女性」を育成することであり,そのような女性は校歌の3番にあるように「強くやさしき人」でもある。そのような女性像のシンボル・イメージが「白い鷗」である(上岡た津,「つよく　やさしく」,白鷗女子短期大学新聞,創刊号)。校章は鷗が翼を広げた様子を図案化しており,カレッジ・カラーはブルーである。カレッジ・スローガンはレポート用紙に印刷してある“something new to discover every day”という言葉であり,学生生活は毎日が知的発見の日々であれ,という意味と解される。自立できる技能を身に付けた女性の育成という建学の精神に基づき,使える英語の修得を目ざす英語科,幼児教育の専門家の育成を目指す幼児教育科,短大では日本初の女性のビジネスの専門家の育成を目指す経営科の3学科構成の短大として現在に至っている。

次に白鷗大学の建学の精神について述べることとする。白鷗大学は上岡一嘉先生により昭和61年に創設された。本学の University Identity の根本には,校章が三大陸と五大洋をシンボライズしていることから看取されるように「国際化に対応できる能力と技術とを身に付けた人材」の育成がある。白いカモメは強くやさしい女性のみならず国際社会に翔こうとする青年のシンボルとなった。上岡先生は本学開学式で「諸君は,国際化社会の日本を担う中核として活躍しなければなりません」と語られ,また昭和63年の入学式では,「若き学生諸君,国際化社会にはばたこう」と語りかけられた(白鷗大学新聞第2号)。文部省に提出した設立趣意書に書かれていることから,本学の育成を目指している学生像は,国際化時代に対応できる能力と技術に加えて,

高度情報化のニーズに対応し，中堅・中小企業の高度化のニーズに応えうる人間である。その3種の能力と技術の何れにウェイトを置くかによって本学には，「国際経営」，「経営情報」，「企業経営」の3コースが設置され，それぞれに対応した3種の教育カリキュラムが準備されている。国際化を最も重視していることは，英語教育の重要視のみならず第2外国語をも重視した教育カリキュラムに端的に表れていると思われる。

育成したい学生像の備えるべき資質又行動規範として上岡先生は次のことを考えておられた。校歌の中の「黎明に道を開けよ」，「まだ知らぬ海を目指して」，「常しえのフロンティアへ」の歌詞に見られるように，進取の精神に溢れ，未知の世界へのチャレンジング・スピリットを持つことが期待されていた。上岡先生は開学式で「たった一度の人生に情熱的にチャレンジして欲しい」と語りかけられ，第1回卒業式では「PLUS ULTRA（さらに向うへ）の挑戦を続けるように」と学生に語られた（白鷗新聞第12号）。また「志し高く掲げて」という歌詞に見られるように理想を高く掲げるように語り，先生は開学式で「若い人達に夢やビジョンが少ないのは残念だ」と嘆じられた。さらに「若き情熱の学府」と歌われているように若々しい情熱を持つようにと説かれ，開学式では「永久に若き情熱の学府に本学が成長するよう」と希望を述べられた。本学マルベリーホールには上岡先生の愛唱した言葉「生命あるかぎり一生懸命生きよ」がギリシャ語で刻まれている。先生は「たゆみなく努力し続けること」の貴さを学生に語り続けられたのみならず自から身を以て実践し続けられた。

上岡先生が突然他界されて，本学の建学の精神を具体化することは我々に残された重い課題となった。理念はただビジョンとして飾られるだけでは無意味である。理念は現実と重ね合せ，理念と現実とのギャップを認識し，そのギャップを埋める為の行動を誘発することにその存在価値がある。ギャップの認識とギャップを埋める為の実践の成果は我々残された者達の翔たこうとする意欲と強い翼の存在とにかかっていると思われる。

（1991年10月1日　文責　柳川）

編集後記 Ⅱ

本号は，平成３年３月６日，入院先の群馬県太田市東毛病院にて急逝された上岡一嘉学長・理事長の追悼号である。

故上岡学長は，白鷗大学開設の昭和61年，いち早く，研究紀要発刊の議を提起され，みずから白鷗大学論集委員会を組織されて会長となり，初年度中に，敢然として本誌第１巻第１号を刊行されたのである。まさしく故学長は，本誌にとってもまた，かけがえのない産みの大恩人であった。謹んで本追悼号を故学長の御霊前に捧呈して，心から御冥福をお祈り申し上げる次第である。

順序が前後してしまったが，故上岡学長の「人と業績」については，故人の学生時代からの友人であり，かつ故人の事業を継承された原田俊夫学長に御執筆いただいた。また，故学長の多方面にわたる業績のうち，特に学問上の業績の詳細については，故人から直接間接の指導を受けられた青山学院大学の坂井幸三郎教授と早稲田大学の宮沢永光教授に御執筆いただいた。さらに，本学旧教職員の永田忠哉・鳥潟博敏両名誉教授と北川豊顧問・元教授からは故人の思い出にまつわる追悼文をお寄せいただいた。いずれも，故上岡学長の人と学問と業績について，全般的にあるいはさまざまな角度から浮き彫りにされた珠玉の文章であって，御執筆いただいた諸先生方には衷心から御礼を申し上げたい。

なお，編集後記Ⅰとして登載した，故上岡学長の「建学の精神」に関する小文は，故人から長年にわたって親しく薫陶を受けられた柳川編集実務委員がまとめ上げたものである。これによって，故上岡学長に対する御理解をより一層深めていただければさいわいである。

最後に，略歴ならびに著作目録の作成は柳川編集実務委員が担当した。略歴の作成過程では，足利学園法人事務局長片倉隆史氏の御尽力をいただき，また，個々の事項について，本学事務局の諸星ノリ子申請室長と手束和正両氏が確認の労をとられた。著作目録の作成過程では，論文掲載研究紀要の調

査について，一橋大学附属図書館と大阪学院大学附属図書館の御厚意にあずかり，また，著書に関しては，白鷗女子短大図書館の管野善子さんと白鷗大学図書館の飯沼玲子さんの御協力をわずらわした。記して，以上の方々ならびに諸機関に対して深甚の謝意を表するものである。

［桑原・原田(博)］